

中国語母語話者を対象とした日本語聴解テストにおける 選択肢提示形式の影響

島 田 めぐみ*

侯 仁 鋒**

キーワード：聴解テスト，中国語母語話者，選択肢提示方法，文字による選択肢，音声による
選択肢

要 旨

本研究は、中国で学ぶ中国語母語話者を対象に、日本語聴解テストにおける選択肢提示形式の影響を考察したものである。研究の目的は、1) 選択肢を文字で提示したテストと音声で提示したテストとでは、結果に違いが生じるか、2) 文字提示形式と音声提示形式との間で正答率について有意差が確認された項目は、どのような特徴があるか、という点について考察することである。調査協力者は、文字提示形式のテストを受験した 63 名と音声提示形式のテストを受験した 63 名である。テスト項目のうち、実験項目は 24 項目であった。統計的分析の結果、文字提示形式と音声提示形式、それぞれの得点の平均値には有意差がないことが明らかになった。しかし、実験項目の各項目について統計的分析を行った結果、文字提示形式のほうが正答率が高い項目が 4 項目、音声提示形式のほうが高い項目が 1 項目認められた。そこで、この 5 項目について、その要因を探るために、4 名の協力者を対象にインタビュー調査を実施した。その結果、文字条件が有利となる項目は、a) 学習者になじみのない語が正答選択肢に含まれている、b) 設問から推測される選択肢内容と実際の選択肢内容が異なる、という特徴を有していた。音声提示形式のほうが有利となる項目については、その要因は特定できず、可能性を指摘するにとどまった。本研究の結果は、中国語母語話者にとっては、文字による選択肢が有利に働くであろうという予測を覆すものであった。これは、中国の学習者は、文字を読みながら聞くという言語行動に慣れていない、日本語能力試験の対策を行っているため音声提示形式の聴解問題に慣れている、などの理由が考えられる。

1. はじめに

日本語聴解テストにおける選択肢の提示形式は、イラストやグラフ、表など視覚情報で提示する形式と、言語情報で提示する形式に二分できる。そのうち、言語情報で提示する形式には、録

*SHIMADA Megumi：東京学芸大学・准教授

**HOU Renfeng：西安交通大学・教授

音されている選択肢が音声で提示される音声提示形式と、選択肢が問題冊子に印刷されている文字提示形式がある。

日本留学試験ではすべての聴解問題が音声提示形式であり、日本語能力試験では言語情報で選択肢を提示する場合、その大半が音声提示形式によるものである¹。英語の聴解試験において文字提示形式が主流であるのに対し、日本語の聴解試験において音声提示形式が主流であるのは、文字体系が比較的複雑な日本語の聴解テストにおいて、文字で選択肢を提示した場合、聴解以外の能力を測ることになり、妥当性および信頼性を損なう可能性があるという懸念からだと考えられる。

しかし、文字選択肢が本当に妥当性や信頼性を低める要因となるのか、もしそうであればどのように影響を及ぼすのかということは、まだ十分に解明されていない。限られた研究の中に、日本国内で日本語を学ぶ留学生を対象に調査した島田（2003, 2006）があるが、海外で学ぶ学習者を対象とした研究は行われていない。妥当性の高い日本語聴解テストを開発するには、海外で学ぶ学習者を対象とした母語別調査が実施され、選択肢提示形式の影響を明らかにすることが不可欠である。

2. 先行研究

聴解テストの難しさを左右する要因を探った研究には、Ginther（2002）、Brindley and Slatyer（2002）、内田・菊池・中畝・前川・石塚（2002）、Sasaki and Monuki（2002）などがある。いずれも、英語テストに関する研究であり、聞く回数、音声の速度、視覚情報の有無などが検討されている。これらのうち、選択肢文字提示形式と音声提示形式の違いを検討しているのは、内田ほか（2002）と Sasaki and Monuki（2002）である。内田ほか（2002）で音声提示形式のほうが文字提示形式よりも難易度が高いという結果が得られているのに対し、Sasaki and Monuki（2002）では両提示形式の間に有意差はないとの結果が得られている。両者において異なる結果が得られた理由として、まず、Sasaki and Monuki（2002）は10項目と項目数の少なさが目につく。次に、内田ほか（2002）が大学生を対象としているのに対し、Sasaki and Monuki（2002）では英語検定3級受験者を対象にしている。前者の受験者群のほうが英語能力が高いと考えられ、能力差の影響も考えられる。

日本語聴解テストに関し、選択肢提示形式の影響を考察したものは、島田（2003, 2006）がある。どちらの実験においても、文字提示形式のほうが音声提示形式よりも正答率が高く、識別力

¹ 日本語能力試験では、1999年度より、問題Ⅰ（選択肢が問題冊子に印刷される形式）に文字による選択肢が導入された。そのため、問題Ⅰの例題は、イラストによる選択肢と文字による選択肢の2例が提示されるようになった。しかし、文字提示形式の出題数は毎年わずかである。

に関しては、両提示形式の間に有意差はないという結果が得られている。さらに、島田（2006）では、項目要因について検討され、選択肢の複雑さ、すなわち選択肢が語か文か、そして談話理解のタイプ、すなわち局所理解か全体理解かということが結果に影響を及ぼしていることが報告されている。選択肢の複雑さについては、選択肢が語の形式では、文字提示形式のほうが平均値が高くなるが、文の形式では両提示形式の間に差は生じないことが明らかになっている。談話理解のタイプについては、局所理解問題すなわち談話の一部を聞き取り正答を得る問題タイプでは、文字提示形式のほうが平均値が高いが、全体理解問題すなわち談話全体から正答を判断する問題タイプでは両提示形式の間に差は生じないことが明らかになっている。

受験者の母語については、島田（2003）で検討されている。対象となった協力者は、日本国内で学ぶ留学生 135 人であり、その内訳は、中国語と韓国語の漢字圏 86 人、それ以外の言語話者の非漢字圏 49 人である。母語による違いが検討された結果、漢字圏（中国語、韓国語）か非漢字圏かということは結果に影響を及ぼさないということが報告されている。つまり、両者ともに、文字提示形式のほうが正答率が高くなるとされている。しかし、文字が有利に働く学習者と不利に働く学習者がいるかどうかということを明らかにするには、さらに、中国語母語話者と韓国語母語話者を分けて調査する必要があるだろう。また、日本国内のみではなく、海外で学ぶ学習者を対象とした調査も必要であろう。現在のところ、母語別の調査、海外での調査を行った研究は報告されていない。

3. 研究の目的

日本語聴解テストにおいて選択肢提示形式が与える影響に関し、母語により違いが生じるか、また海外と国内では異なるかということを明らかにするために、海外において母語別に調査を行う必要がある。そこで、本研究では、日本語学習者がもっとも多く、また文字による影響が大きいと考えられる中国で学ぶ中国語母語話者を対象とし、日本語聴解テストについて、以下の2点を検証することを目的とする。

- 1) 選択肢を文字で提示したテストと音声で提示したテストとでは、結果に違いが生じるか。
- 2) 選択肢文字提示形式と音声提示形式との間で正答率について有意差が確認された項目は、どのような特徴があるか。

4. 調査について

4-1. 実験用テストについて

本稿では、島田（2006）の結果と比較できるように、島田（2006）で使用されたテストを利用

表1 テストの構成

	項 目 数	項目数計	フォーム1 選択肢提示形式	フォーム2 選択肢提示形式
実験項目	各級6項目	24項目	文字	音声
共通項目	3, 2, 1級各1項目	3項目	文字	文字
共通項目	4, 3, 2級各1項目	3項目	音声	音声
全項目数	30項目			

することとする。島田（2006）のテストの概要は以下のとおりである。

実験用日本語聴解テストは2種類作成され、それぞれのテストをフォーム1、フォーム2と呼ぶ。フォーム1の実験項目は選択肢文字提示形式（以下、文字条件）、フォーム2の実験項目は選択肢音声提示形式（以下、音声条件）である。原問題項目は、日本語能力試験聴解問題のうち選択肢が音声で提示される問題Ⅱの過去問題から選ばれた。実験項目は4級から1級までの項目を含む24項目、共通項目は6項目である。選択肢を音声で提示するフォーム2は、選んだ過去問題項目のまま、つまり選択肢が録音された状態のものが使用された。選択肢を文字で提示するフォーム1では、コンピュータ上で音声から選択肢部分を削除し、問題冊子に文字による選択肢を印刷した。テストの構成をまとめたものが表1である。テストの所要時間は、フォーム1は30分、フォーム2は40分である。フォーム2は、選択肢がすべて音声のため、長く時間を要している。

なお、文字による選択肢のうち漢字には、原問題項目が出題された級にあわせてルビがふられた。日本語能力試験の出題基準を参考に、該当級以下の漢字にはルビはふられていない。たとえば、3級の実験項目は、3級と4級の出題基準内の漢字にはルビはふられておらず、それ以外の漢字にはルビが付されている。

4.2. 調査の概要

4.2.1. 調査1の概要

本研究では、まず、目的1)の「選択肢を文字で提示したテストと音声で提示したテストとでは、結果に違いが生じるか」を明らかにするために、中国在住中国語母語話者を対象に、両条件のテストを実施し、統計的に分析する。この調査を、本稿では、調査1と呼ぶ。

調査1は、2007年12月、中国のA大学とB大学にて行われた。それぞれの大学において、フォーム1テスト受験者とフォーム2テスト受験者はランダムに分けられた。フォーム1テスト受験者63名、フォーム2テスト受験者63名であった。各大学における両テスト受験者の内訳は表2のとおりである。

表 2 量的調査の協力者（人数）

	A 大学	B 大学	合計
文字条件	43	20	63
音声条件	43	20	63

4-2-2. 調査 2 の概要

研究の目的 2) の「選択肢文字提示形式と音声提示形式との間で正答率について有意差が確認された項目は、どのような特徴があるか」を検証するために、インタビュー調査（調査 2）を行い、問題内容を分析する。

調査 2 は、2008 年 3 月に、中国の A 大学にて実施された。調査協力者は、調査 1 に参加しなかった A 大学の 3 年生の中から比較的日本語能力の高い者と中程度の者 2 名ずつに依頼した。調査では、1 項目ずつ音声 CD を停止し、どのように解答を得たか、説明を求めた。また、そのほか気づいたことを話すよう求めた。協力者には、説明する言語は日本語でも中国語でもいいと指示したが、すべて日本語で行われた。インタビュー内容はすべて録音された。対象とした項目は、調査 1 で、正答率に関し文字条件と音声条件の間に有意差が観察された項目である。協力者のうち 2 名は文字条件、別の 2 名は音声条件の問題項目を解いた。インタビューは、各条件の 2 名ずつ実施した。

5. 結果と分析

5-1. 調査 1 と統計的分析

5-1-1. 基本統計量と共通項目の検討

各テストフォームおよび共通項目の平均値、標準偏差等は表 3 のとおりである。各テストフォームの α 係数はいずれも 0.9 を上回り、信頼性が高いテストであることがわかる。

フォーム 1 とフォーム 2、それぞれのテストフォーム受験者の能力に差がないことを確認する。表 4 は、共通項目 6 項目の結果を、テストフォームごとにまとめたものである。テストフォーム 1 とフォーム 2 の結果の等分散性の検定を行ったところ、等分散性が確認できた ($F(62,62) = 0.654, p > .10$)。そこで、共通項目におけるフォーム 1 受験者とフォーム 2 受験者

表 3 基本統計量

	項目数	受験者数	平均値	標準偏差	信頼性係数 (α 係数)
フォーム 1	30	63	19.127	7.571	0.927
フォーム 2	30	63	17.873	7.470	0.917

表4 フォーム別共通項目の基本統計量

フォーム	N	平均値	標準偏差
1 (文字)	63	4.064	1.848
2 (音声)	63	3.889	1.935

表5 フォーム別実験項目合計点の基本統計量

フォーム	N	平均値	標準偏差
1 (文字)	63	15.064	6.032
2 (音声)	63	13.984	5.780

の平均の差を t 検定にかけた結果、両者の差は有意ではなかった ($t(124) = 0.518$, $p > .50$)。フォーム1受験者とフォーム2受験者の間に日本語聴解能力に関して差がないことが確認できたので、以下ではフォーム1 (文字条件) とフォーム2 (音声条件) の実験項目の結果の差を検討していく。

5-1-2. 実験項目合計点の結果

テストフォーム別に実験項目24項目の合計得点の平均値、標準偏差をまとめたものが表5である。テストフォーム1とフォーム2の実験項目の結果の等分散性の検定を行ったところ、等分散性が確認できた ($F(62, 62) = 0.000$, $p > .50$) ため、 t 検定を行った。その結果、両者の平均値の差は有意ではなかった ($t(124) = 1.026$, $p > .10$)。すなわち、文字条件と音声条件、それぞれの得点の平均値には差がないことが明らかになった。

5-1-3. 各項目の結果

次に、項目ごとに、文字条件と音声条件とで、正答率に差があるか検討する。各項目の文字条件正答率、音声条件正答率、および両条件の差を検定した結果をまとめたものが表6である。正答率の差は、比率の差の検定²を行った。両条件の間に差があると認められた項目には、項目番号に「*」を付した。項目21と25はいずれも、文字条件のほうが正答率が高いことがわかる。

5-1-4. 得点段階別各項目の結果

全回答者を対象とした分析では、易しい項目は選択肢提示形式にかかわらず正答率が高く、逆に難しい項目では低くなる。そのため、両提示形式の間に有意な差は検出されない。しかし、難しい項目でも、能力の高い受験者群を対象とした場合、選択肢提示形式により異なる結果が得られる可能性がある。そのため、得点段階別に分析することとする。本研究で使用した項目は日本語能力試験4級から1級の問題項目からなっているため、それにあわせて、受験者を合計点にしたがって、4段階の得点段階にグループ分けした (表7)。合計点は、両条件の間において正答率

² 比率の差の検定の手順は以下のとおりである (西平 1957: 156)。1) サンプルのふたつの比率 p , q を計算する。2) $P^* = (np + mq) / (n + m)$ を計算する。3) サンプルの比率の差の分散 $P^*(1 - P^*) \{ (1/n + 1/m) \}$ を計算する。4) $|p - q|$ と $2 * \sqrt{P^*(1 - P^*) \{ (1/n + 1/m) \}}$ との大小を判定する。もし、 $|p - q| \geq 2 * \sqrt{P^*(1 - P^*) \{ (1/n + 1/m) \}}$ ならば、 $p \neq q$ と結論をくだす。

表 6 各項目正答率と「比率の差の検定」結果

項 目	7	8	9	10	11	12	13	14
文字正答率 (p)	0.571	0.937	0.794	0.902	0.698	0.698	0.794	0.683
音声正答率 (q)	0.705	0.836	0.787	0.820	0.705	0.721	0.885	0.574
$ p-q $	0.133	0.100	0.007	0.085	0.007	0.023	0.092	0.109
$2\sqrt{P^*(1-P^*) (1/n+1/m)}$	0.171	0.113	0.145	0.123	0.163	0.162	0.131	0.172
項 目	15	16	17	18	19	20	21*	22
文字正答率 (p)	0.762	0.333	0.587	0.540	0.873	0.762	0.746	0.698
音声正答率 (q)	0.754	0.443	0.475	0.426	0.787	0.672	0.557	0.639
$ p-q $	0.008	0.109	0.112	0.113	0.086	0.090	0.189	0.059
$2\sqrt{P^*(1-P^*) (1/n+1/m)}$	0.153	0.174	0.178	0.178	0.134	0.161	0.170	0.168
項 目	23	24	25*	26	27	28	29	30
文字正答率 (p)	0.413	0.413	0.651	0.651	0.556	0.444	0.492	0.095
音声正答率 (q)	0.393	0.311	0.443	0.541	0.443	0.541	0.475	0.180
$ p-q $	0.019	0.101	0.208	0.110	0.113	0.097	0.017	0.085
$2\sqrt{P^*(1-P^*) (1/n+1/m)}$	0.175	0.171	0.177	0.175	0.178	0.178	0.178	0.123

表 7 得点段階別受験者数

得点	段階 1 0-11	段階 2 12-18	段階 3 19-22	段階 4 23-28	計
文字	14	15	14	20	63
音声	16	16	14	17	63
計	30	31	28	37	126

表 8 得点段階別有意差検定の結果

第 2 段階	文字正答率 (p)	音声正答率 (q)	$ p-q $	$2\sqrt{P^*(1-P^*) (1/n+1/m)}$
項目 19	1.000	0.688	0.312	0.264
項目 21	0.667	0.250	0.417	0.358
項目 25	0.533	0.188	0.345	0.344
第 3 段階	文字正答率 (p)	音声正答率 (q)	$ p-q $	$2\sqrt{P^*(1-P^*) (1/n+1/m)}$
項目 7	0.714	1.000	0.286	0.265
第 4 段階	文字正答率 (p)	音声正答率 (q)	$ p-q $	$2\sqrt{P^*(1-P^*) (1/n+1/m)}$
項目 27	0.950	0.588	0.362	0.272

の差がある項目 21 と項目 25 をのぞいた 28 項目で算出した。

得点段階別に、各項目について、文字条件と音声条件の間に有意差があるか、比率の差の検定を行った。その結果、有意差が確認できたのは、第 2 段階において 3 項目、第 3 段階において 1 項目、第 4 段階において 1 項目であった (表 8)。第 3 段階における項目 7 のみ、音声条件のほ

うが正答率が高いが、ほかの項目はすべて文字条件のほうが正答率が高い。

5-2. 調査2と内容的分析

5-2-1. 文字条件に有利な項目

文字条件のほうが正答率の高い項目は、全体の分析では、項目21、25の2項目であった。得点段階別分析では、この2項目以外に、項目19と27の2項目が文字条件のほうが正答率が高いという結果が得られた。以下では、これらの4項目について、文字条件のほうが正答率が高くなる要因を分析する。以下の各項目の分析では、問題内容、分析、有意差が観察された得点段階における各選択肢選択率を記述する。分析では、インタビュー調査（調査2）の結果を中心に分析する。

[項目19]

問題内容

設問：男の人と女の人が話しています。どうして部屋が寒いのですか。

男性：なんか、寒いねえ。窓、開いてるんじゃないの？

女性：ドアじゃないですか。時々太郎が開けっ放しにするから。

男性：いや、閉まってたと思うけどな。見てきてよ。

女性：あなた行ってきてくださいよ。

男性：しょうがないなあ……

女性：あら、どうでしたか。

男性：窓でもドアでもないな。あれ？このストーブ。

女性：あ、いけない。さっき、ちょっと空気が悪くなったと思って。

男性：何だ、寒いわけだ。

設問：どうして部屋が寒いのですか。

1. 窓が開いているからです。
2. ドアが開いているからです。
3. 窓もドアも開いているからです。

*4. ストーブがついていないからです。

（日本国際教育協会・国際交流基金（2001）より）

分析

調査2では、文字条件の協力者も音声条件の協力者も全員、「ストーブ」という語を知らないと答えた。文字条件の協力者1名は、「選択肢の『ストーブ』の文字を見て、（知らない語なので）緊張したが、（スクリプトの）『あれ？このストーブ』『あ、いけない』で（答が）わかった」と説明している。このように、文字条件は、「ストーブ」という語が理解できずとも、この語が

キーワードとなるであろうことを推測しながら聞くことができる。一方、音声条件の受験者は、「ストップ」が選択肢となっていることを確認することができない状態でスクリプトを聞かなくてはならない。そのため、文字条件のほうが有利となったと考えられる。

表 9 項目 19 の第 2 得点段階における各選択肢選択率

	文字	音声
選択肢 1	0.000	0.125
選択肢 2	0.000	0.125
選択肢 3	0.000	0.063
選択肢 4	1.000	0.688

[項目 21]

問題内容

設問：女の人が電話で話しています。渡辺さんはどうしますか。

女性：あら、渡辺さん、お久しぶり。今どこ？……え、京都？

じゃ、どこかで会いましょうか……ええっ、もう帰るの？

いつから来ていたの？……え、2 日も前から？

来ていたのなら早く連絡してくれればよかったのに。

設問：渡辺さんはどうしますか。

1. 京都に来たので女の人と会います。
- *2. 京都に来たけれど女の人と会いません。
3. 京都に来なかったので女の人と会いません。
4. もし京都に来たら女の人に会います。

(日本国際教育協会・国際交流基金 (2002) より)

分析

調査 2 では、音声条件の協力者の 1 人は、渡辺さんが「女の人と会わない」ということは正しくとらえていたが、「京都にいる」ということは理解できていなかった。これは、この項目の設問が「渡辺さんはどうしますか」であることにより、「京都にいるかどうか」ということには注目していなかったためであろう。つまり、音声条件の受験者は、設問「渡辺さんはどうしますか」から「会うかどうか」を中心に聞くことになったと考えられる。一方、文字条件の受験者は、選択肢情報から、「京都に来たかどうか」も聞かなくてはならないことがわかっている。調査 1 の結果を見ても (表 10, 11)、音声条件では、誤答である選択肢 3 (京都に来なかったので女の人と会いません) が多く選ばれている。特に、第 2 得点段階 (表 11) では、正答 (選択肢 2) よりも多く選ばれている。調査 2 同様、音声条件の受験者は、「会いません」の部分は正しく理解しているが、「京都に来たかどうか」を把握していなかった受験者が多かったと言える。した

がって、文字条件のほうが正答率が高いのは、選択肢を見ていることにより、聞くべきポイントが絞れたからだと考えられる。

表 10 項目 21 の全受験者における各選択肢選択率

	文字	音声
選択肢 1	0.048	0.048
選択肢 2	0.746	0.556
選択肢 3	0.127	0.270
選択肢 4	0.079	0.127

表 11 項目 21 の第 2 得点段階における各選択肢選択率

	文字	音声
選択肢 1	0.000	0.125
選択肢 2	0.667	0.250
選択肢 3	0.200	0.438
選択肢 4	0.133	0.188

[項目 25]

問題内容

設問：高橋さんと女の人が話しています。

高橋さんのお父さんはどうして山へ行くのをやめましたか。

女性：高橋さんのお父さん、有名な登山家なんですか？

男性：そうだったんだけど、おとしあたりから山に行かなくなったんだ。

多少の雪や風なんかものともしないで、年に 100 日以上も山に登っていたんだけど。

女性：大きなけがでもしたの？

男性：けがなんか若いころからしょっちゅうしているよ。

それがうちの娘が 3 つになって、「おじいちゃん、けがしたらあぶないよ」って言ったら、急に山をやめちゃったんだ。

設問：高橋さんのお父さんはどうして山へ行くのをやめましたか。

1. 雪や風が大変になったからです。
2. 大きなけがをしたからです。
3. 高橋さんに言われたからです。
- *4. お孫さんに言われたからです。

(日本国際教育協会・国際交流基金(2003)より)

分析

文字条件の協力者の 1 人は、正答選択肢にある「孫」の読み方を知らないと述べている。スク

リプトの「うちの娘」が正答選択肢では「孫」に置き換えられているため、「孫（まご）」を知らない音声条件の受験者は、「まご」と音声で聞いただけでは「うちの娘」と結びつかないだろう。一方、文字条件では、漢字で「孫」が提示されているので、有利に働いたと考えられる。第2段階における文字条件と音声条件の選択肢選択率を比較すると（表13）、音声条件の受験者は、正答（選択肢4）よりも、選択肢2と3のほうが多く選ばれている。選択肢4の「孫（まご）」が理解できない音声条件の受験者は、スクリプトの「『おじいちゃん、けがしたらあぶないよ』って言ったら、急に山をやめちゃったんだ」から、選択肢2や3を選んだと考えられる。

表12 項目25の全受験者における各選択肢選択率

	文字	音声
選択肢 1	0.063	0.159
選択肢 2	0.111	0.175
選択肢 3	0.175	0.222
選択肢 4	0.651	0.444

表13 項目25の第2得点段階における各選択肢選択率

	文字	音声
選択肢 1	0.000	0.125
選択肢 2	0.133	0.313
選択肢 3	0.333	0.375
選択肢 4	0.533	0.188

[項目27]

設問：インタビューを聞いてください。男の人の会社で教えたことのないのは何ですか。

女性：おはようございます。「おはよう FM, 今日の1分インタビュー」,

株式会社 ETA の渋谷さんに来ていただいております。

渋谷さん, ETA っていうのは……。

男性：いろいろな会社から委託されて, 新入社員の皆さんの研修を行う会社なんですよ。

女性：例えば, お辞儀のしかたとかですか。

男性：いやー, うちでは, 依頼されたことないですねえ。

お辞儀とか立ち振る舞いは, よくスチュワーデスの訓練などで行われているようですが,

うちでは多いのは, 職種によっても違うんですが,

デパートの売り子さんでしたら敬語ですね。

それから, 営業の人, これは笑顔の練習をするんです。

女性：笑顔ですか。練習すると上手になるんですか。

男性：ええ。あと, 一般的なところでは,

事務のワープロや経理のかたのコンピューターです。

設問：新入社員研修で教えたことのないのは何ですか。

1. ワープロです。
- *2. おじぎのしかたです。
3. コンピューターです。
4. 笑顔の作り方です。

(日本国際教育協会・国際交流基金(1997)より)

分析

インタビュー調査では、全員が「お辞儀」という語を知らないと答えた。文字条件受験者は、選択肢では「おじぎ」とひらがなで表記してあるため、項目25の「孫」とは異なり、意味を推測することはできない。しかし、スクリプトで「お辞儀は教えない」というヒントを聞いて、すぐに選択肢を確認できる。そのため、文字条件のほうが有利となったと考えられる。音声条件では、知らない語や表現が聞こえてくる、という心構えができず、また、そのような語と選択肢をすぐに照らし合わせることができないため、正答率が低くなったのであろう。また、この設問は「教えたことのないもの」を問うているが、インタビュー調査では、文字条件、音声条件とも、それぞれ1名の協力者が「教えたことがあるもの」が問われていると誤解していた。設問はどちらの条件下でも印刷されていないため、条件による違いはないであろうが、問題の作り方として、「ない」ことを問うのは好ましくないとと言える。

表14 項目27の第4得点段階における各選択肢選択率

	文字	音声
選択肢 1	0.050	0.294
選択肢 2	0.950	0.588
選択肢 3	0.000	0.059
選択肢 4	0.000	0.059

5-2-2. 音声条件に有利な項目

音声条件のほうが正答率が高いという結果が得られた項目は、第3得点段階における項目7のみであった。前節同様、分析を行う。

[項目7]

問題内容

設問：二人はこれから何をしますか。

女性：そろそろ休みましょうか。

男性：ええ、昼ごはんのあと、3時間も仕事をしましたからね。

女性：そうですね。お茶、飲みましょうか。

男性：そうですね。じゃあ、お菓子持ってきます。

女性：さっきチョコレートを食べたから、わたしは結構です。

男性：じゃあ、わたしも。お菓子はいいですね。

設問：二人はこれから何をしますか。

1. 昼ごはんを食べます。
2. 仕事をします。
- *3. お茶を飲みます。
4. お菓子を食べます。

(日本国際教育協会・国際交流基金(1998)より)

分析

比較的高得点を得ている得点段階3の音声条件受験者に有利となる要素は、インタビュー調査から得ることはできなかった。しかし、ひとつの可能性を述べたい。表15を見ると、文字条件では、選択肢1と4を、それぞれ14.3%の受験者が選択している。選択肢1と4はともに、「食べます」が含まれており、選択肢から正答を推測する、いわゆる「受験テクニック」から、この選択肢のいずれかが正答であると考えた可能性がある。すなわち、4つの選択肢のうち、2つの選択肢のみに共通する表現が含まれる場合、そのどちらかが正答となるという考え方である。この項目のインタビュー調査では、このような内容は得られなかったが、ほかの項目において、文字条件の受験者が「選択肢を見て正答を推測できた」という内容のコメントを述べている。選択肢から正答を推測するのは、音声条件では難しく、文字条件では比較的行いやすいであろう。しかし、この項目のように、推測した選択肢が誤答であると、逆に音声条件のほうが正答率が高くなるという可能性が生じるであろう。

表15 項目25の第4得点段階における各選択肢選択率

	文字	音声
選択肢 1	0.143	0.000
選択肢 2	0.000	0.000
選択肢 3	0.714	1.000
選択肢 4	0.143	0.000

5. まとめと今後の課題

本研究では、まず、目的1)の「選択肢を文字で提示したテストと音声で提示したテストとでは、結果に違いが生じるか」ということを明らかにするために統計的分析を行った。その結果、

中国で学ぶ中国語母語話者にとって、日本語聴解テストの選択肢が文字であるか音声であるかは、結果に影響を及ぼさないということが明らかになった。日本国内で行われた島田（2006）では、文字条件のほうが得点が高いという結果が報告されており、中国において文字が有利に働くであろうという予測を覆す結果となった。国内と海外で異なる結果が得られた理由として、第1に、国内の受験者のほうが、文字を見ながら日本語を聞くという行動に慣れているということが考えられる。中国で学ぶ学習者は、文字を見ながら聞くという行動が日常的に行われないため、文字による選択肢が必ずしも正答を得る助けとなるわけではなかったのではないだろうか。第2に、今回調査を行った2大学では、日本語能力試験の対策指導が行われているため、受験者は日本語能力試験で出題される音声提示形式に慣れていたと考えられる。そのため、特に、文字提示形式の選択肢が有利に働くことにはならなかったのではないだろうか。

全体の得点では、両条件の間に有意差は観察されなかったが、各項目の分析では、有意差が認められた項目が5項目あった。4項目は文字条件のほうが、1項目は音声条件のほうが正答率が高いという結果であった。このように、項目によっては、文字条件のほうが正答率が高い項目もあり、そのような項目が多ければ、当然合計点において、文字条件のほうが得点が高くなったであろう。

目的2)の「文字提示形式と音声提示形式との間で正答率について有意差が確認された項目は、どのような特徴があるか」ということを明らかにするために、両条件の間に有意差が生じた5項目について、インタビュー調査を中心に分析した。その結果、文字条件が有利となる項目の特徴は、以下のようにまとめることができる。

a) 受験者になじみのない語が正答選択肢に含まれている。

（項目19の「ストーブ」、項目25の「孫」、項目27の「おじぎ」）

b) 設問から推測される選択肢内容と、実際の選択肢内容が異なる。

（項目21）

a) の特徴を有する項目に関しては、文字条件の場合、なじみのない語を文字で確認できるため、正答を特定する助けになると考えられる。特に、項目25の「孫」は漢字で表記されているため、意味理解の助けとなるであろう。漢字表記ではない「ストーブ」「おじぎ」については、意味理解の助けにはならないものの、そのような語が聞こえてくるだろうということを準備できるため、文字条件に有利となると思われる。b) については、文字条件の場合、選択肢を確認できるため、聞くべきポイントを絞ることができるという利点がある。文字による選択肢の影響を排除するためには、このような特徴のある項目の出題は避けるべきであろう。

島田（2006）の日本国内の調査では、「選択肢が語形式の問題項目では、文字提示形式のほうが平均値が高くなるが、文形式では両提示形式の間に差は生じない」と分析されているが、本研究で文字条件のほうが正答率が高いと認定された項目は、4項目中3項目が文形式である。すな

わち、文字条件のほうが正答率が高くなる要因は、日本国内とは異なると言えよう。

得点段階分析において、音声条件のほうが正答率の高い項目が1項目あったが、その要因を特定することはできなかった。しかし、可能性として、受験テクニックがあげられる。今回のインタビュー調査でも、文字条件協力者の1人が、項目21について、「問題を聞く前から、『～けれども、～なかった』という文構造である選択肢2が答っぽいと思った」と述べている。このように、選択肢から正答を推測するいわゆる「受験テクニック」に秀でている受験者にとっては、文字条件のほうが選択肢を分析するには好都合であろう。項目7は、選択肢から正答を推測しようとする正答を得られないため、文字条件が不利になってしまったのではないだろうか。

有意差の検出された項目は得点段階により異なっており、全体の分析では見えてこなかった項目について検討することができた。ある項目がある受験者群にとって易しいあるいは難しすぎる場合は、選択肢の提示形式による差は生じないだろう。基本的には、受験者群にとって、易しすぎもなく、難しすぎもしない場合に、条件による差が生じ得ると考えられる。したがって、選択肢の影響を確認するためには、得点段階別の分析は有意義であったと言える。しかし、得点段階別で有意差が観察された項目の特徴は、得点段階による違いは見られなかった。この点については、本研究では条件間で差の生じた項目が少なかったため、今後、異なる項目セットを使用した検証が必要である。

今回、選択肢提示形式の影響を、海外で学ぶ学生を対象に、初めて調査および分析を行った。しかし、中国の特定の2大学で行ったため、今回の結果は、聴解教育の方法などの影響を受けている可能性もある。今後、同じ中国でも異なる教育機関において調査することが望まれるだろう。また、統計的に分析を行っているものの、協力者数は十分とは言えず、さらなる検証が必要である。さらに、海外で学ぶ非漢字圏を対象とした調査を実施することにより、母語による違いを明らかにすることができるだろう。調査2に関しても、協力者数は4名と限られていたため、さらに多くの協力者からデータが得られれば新たな視点が得られる可能性がある。これらは、今後の課題としたい。

引用文献

- 内田照久・菊地賢一・中畝菜穂子・前川真一・石塚智一 (2002) 「英語リスニング・テストにおける音声の時間構造と提示情報の様式が項目特性に与える影響」『教育心理学研究』第50巻, 1-11
- 島田めぐみ (2003) 「日本語聴解テストにおける選択肢提示形式の影響」『日本語教育』119号, 21-30
- (2006) 「日本語聴解テストにおいて難易度に影響を与える要因」『日本語教育』129号, 1-10
- 西平重喜 (1957) 『統計調査法』培風館
- Brindley, G. and Slatyer, H. 2002. Exploring task difficulty in ESL listening assessment. *Language Testing*, 19, 369-394.
- Ginther, A. 2002. Context and content visuals and performance on listening comprehension stimuli. *Language Testing*, 19, 133-167.

Sasaki, N. and Monuki, K. 2002. Revisions to the listening comprehension section of the STEP third grade test. *Proceedings of the Fifth International Conference on English Language Testing in Asia*, 93–108.

引用資料

- 日本国際教育協会・国際交流基金（1997）『平成 8 年度日本語能力試験 1・2 級試験問題と正解』凡人社
日本国際教育協会・国際交流基金（1998）『平成 9 年度日本語能力試験 3・4 級試験問題と正解』凡人社
日本国際教育協会・国際交流基金（2001）『平成 12 年度日本語能力試験 1・2 級試験問題と正解』凡人社
日本国際教育協会・国際交流基金（2002）『平成 13 年度日本語能力試験 1・2 級試験問題と正解』凡人社
日本国際教育協会・国際交流基金（2003）『平成 14 年度日本語能力試験 1・2 級試験問題と正解』凡人社